ふたなり妖魔に悪堕ちした退魔巫女の幼馴染に逆アナル調教でメス堕ちさせられる話
-悪堕ちヒロインに堕とされる5-

プロローグ

「対妖魔用の御札に、魔除けの清め砂だね。うん、わかった。使いかたはいつもと同じでいいんだよね？」
「妖魔の潜む異界領域に入ったら、すぐに御札を展開して、全周囲に警戒を張るから。」
「祈祷師見習いのキミに普段からサポートしてもらってるから、ボクもこうやって退魔巫女として活動できるんだ。ボクひとりだったら、すぐに、くじけちゃってたかもしれないから」
「その……本当に、ありがとう」
「ボクも正式な退魔巫女・神無月神楽として、その名前に恥じないように、頑張らないと！」

「あ、やっぱり、ボク、緊張してるかな……？」
「うん、そうだよ。キミも聞いてると思うけど、今回の敵は、普通の妖魔とは違って周辺の妖魔たちを束ねているボスみたいなヤツなんだって」
「いわゆる特級妖魔って言われる、大物の妖魔。一説には千年生きてるとも伝えられる化け物ぞろい。溢れる妖気で周囲に影響を与えて、新たな妖魔を生みだす元凶とも言われてるんだ」
「発見次第、すぐに滅ぼさないと、あいつらの手で異界領域が増えてザコ妖魔たちがまた生み出される。」
「結果、ボクらの知らない場所でまた犠牲者、増えてしまう……だからこそ、どんな危険をおかしてでも、特級クラスは退治しなきゃ」
「そんな特別な意味のある作戦に抜擢されるってことは、ボクも一人前の退魔巫女として認められたってことだよね」
「すごく誇らしいことだと思うし、その責任を果たすために頑張らないと！」
「あ……ごめん。なんだか熱くなっちゃって。けど今回は特級妖魔が相手だし、ボクだけじゃなく」
「先輩の退魔巫女も参加するから楽勝だよ。逆にボクは先輩たちの足を引っ張らないように」
「気を付けないといけないかな。てへっ♪」

「……え、ふっ、震えてなんてないよ。これは武者震い……！」
「だって特級クラスの強い妖魔と戦えるって思ったら、わくわくして……本当だってば……全然、これっぽっちも怖くなんてないからね……！」
「あ～信じてないな。もうっ。でも、キミにはいつも助けられっぱなしだよね。この間の戦いでも、キミの作ってくれた御札がなかったらボクは妖魔に囚われて、そのまま堕落してたかもしれないし」
「妖気を全身に注がれて、本当に危なかったんだ……けど、キミの御札が最後まで守ってくれて、

気をしっかり持つことができたんだ」
「今回もキミから、攻撃用に、防御用、召喚用と色々御札を貰ったし、それにほら、これっ。」
「キミの魔祓いの力が込められた戦闘用の巫女装束も、すっごく心強いよ。そばにキミがいて、一緒に戦ってくれてるって感じがする」
「いつも守られてるって思うと、勇気も湧いてきて、百人力だよっ！」
「大丈夫だって！　強い先輩もいるし、ボクだって幾つもの戦いをくぐり抜けてきた一人前の退魔巫女なんだから強大な妖魔でも、きちんと退治して明日の朝、かならずもどってくるよ！」
「それに……帰ってきたら、キミに伝えたいことがあるんだ。」

「あ……なにかは秘密……けどっ、絶対に戻ってくるから。じゃ、行くね。心配しないで、待ってて！」

シーン1

「あ……起きてたんだ、よかった……その、こんばんは」
「こんなに夜遅くごめんなさい。あれから三日も顔出してなかったし、心配かけてると思ったから、つい来ちゃった。」
「うん、体は大丈夫。どこもケガしてないよ。話しには聞いてると思うけど特級妖魔の討伐には失敗しちゃったんだ」
「先輩が、妖魔の手に堕ちていて最初から罠だったの。追い詰めた、と思ったら一瞬で全員捕まって、もちろんボクもね……」

「その、三日間、ずっと犯されつづけたんだ。妖魔様の触手で全身を絡め取られて、はぁ、はぁっ……おまんこもアナルも、めちゃくちゃにかきまわされてイキまくって、頭も真っ白で……あふ、はふぅ……あんなに自分を忘れて、気持ちよくなれたのなんて初めて……」
「ボクら、弱っちい人間ふぜいが、大妖魔様に逆らうなんて無駄なことだったんだって、いっぱいいっぱい犯されて、体に刻み込まれちゃった」
「キミにもわかるよね。ボクの中身が変ちゃってるの……」
「ふふ、ふふふふ」

「それでねボク、大妖魔様から最初に会う人間は一番大切な人にしろってご命令を受けて、キミのところに来たんだ…♡」
「それにボク、帰ったら伝えたいことがあるって、言ったよね？ あれは……キミのこと好きだって告白するつもりだったんだ。」
「だって、幼馴染でずっとそばにいるのにキミってば、煮え切らないし。ボクから言うしかないな、って、中身が変わっちゃったけど、キミへの思いは変わらないよ……」

「だって、こんなに美味しそうなんだもん。あれ？ 震えて後退りして、どうしたの？」
「ボクのこと心配してくれてもいいのに。」
「大丈夫、大丈夫。」
「ボクも沢山犯されて、無理矢理イカされたけど、変わっていくたびに全身が気持ちよくて幸せになっちゃうんだ。ああ、大妖魔様のアレ、思い出すだけで……ふふふ」
「退魔巫女として頑張ってきてよかった。あんなめちゃくちゃに人間じゃ味わえない快楽に押し流されるなんて……沢山の妖気を注がれて体の中から犯されるの、はぁ、はぁ……何回も何回も数えきれないぐらい中に出されてイってる最中にイって頭真っ白にされてぇ……最期に全部受け入れて眷属にしてもらうのとっても気持ちいいんだよ」

「ふふふ、そうだよ、ボク、妖魔になっちゃったってこと♪」

「だって退魔巫女なんかよりも、気持ち良くって、素敵なことがいっぱいあるんだよ……今だって、キミを見て、すっごい興奮してお股がエッチに疼いちゃってる♡」
「いやらしいおツユ、くふぅ、奥から溢れてきて、んん、クリも勃起してきちゃってる♡」
「キミに見てもらえるって思うと興奮して……ああ、ああ、ボクの妖魔の本性を見せてあげる……まずは、大妖魔様に付けて頂いた、んあ、んあお……んおおおっ」
「ふたなりチンポからぁ……んん、んんん♡　ふぁ……はぁ、はぁっ……ず～っと体に隠してたけど、キミを見てたら勃起ぃ、我慢できなくなってきちゃったぁ♡」
「あふ、あふぁ……あはぁぁ…♡　アへりながらぁ、びっきびきにそり返ったふたなりオスマラから……あう、あううっ……カウパーぁ、びゅぐびゅぐぅ、噴き上げひゃって♡」
「こんな姿ぁ、見られちゃったらもう隠す意味ないよね……それに、ちゃっちい人間の格好なんて、窮屈でうんざりだし♡」

「んあ、んあああ、んあはぁあああぁ～っ……」

「ほらぁ、これが妖魔に堕ちたボクの真の姿だよ妖気溢れる角に、ふぅ、ふぅっ、てらてら光る、ドスケベな紫の素肌が素敵だよね？」
「はぁ、はぁっ、全身からドロッとした黒い力が溢れてるのぉ、この解放感ったらないよ……あはぁ～っ……最高の気分ってヤツぅ」
「妖魔になり立てで、気を抜いたら、んい、んいい、んふいいっ、いっ、イっひゃいそう」
「ふぅ、ふぅっ……けどさ、大妖魔様が大切なヒトに会いなさいって言った意味、ようやくわかちゃったぁ……はふ、くふぅ…♡だって、キミのこと、前よりもかわいくって、とてもとても美味しそうに見えるんだもの……ごくっ」
「思い切りベッドに押し倒して、ボクの手で、ひいひい喘がせてぇ、あふ、はふぅ……犯したくて仕方なくなるヤツだし、これぇ」
「キミはボクのものなんだからね……ごくっ」
「このままベッドに、んんんっ！」
「だから、逃げようとしても、無駄だって。キミの部屋全部、ボクの異界領域に塗り替えられてるから。わざわざ夜中に来たのは、そのため」
「夜は妖魔の時間だからね。現実の世界とは、完全に切り離されちゃってるから、逃げることも、助けを呼ぶ声だって届かないよ。くすすっ♪」
「ああ、ああ♡　妖魔が人を襲う気持ちってこんなに素敵だったんだ♡　邪魔な服ははぎとっちゃうね。」
「きれいな肌、ちょっと汗ばんでいい匂いだよ……ボクのフタナリちんぽを擦り付けてあげたら……ビクって震えて可愛いよ。」
「ボクのー、フタナリちんぽ。どこに突き立てようとしているかわかるよね……はぁ、はぁ♡　キミのおしりの穴、ぴくぴく動いてそんなに楽しみなのかなぁ♡」

「ほらぁ、体の力を抜いて、ラクにしてよ。そのほうが、キミも犯されても痛くないと思うよ」

「それじゃキミのアナルに、んんっ」
「硬く尖ったチンポ先をあてがって――んあ、んああ、このまま中に押しこんでいくね」
「んう、んううっ！」
「そらっ、どんどん奥に潜ってこの締め付け、たまらなくいいよ」
「初物って感じがして、興奮するぅ。くう、くううう、あと少しで一番奥まで、んんん、到着ぅ……」
「あはっ、キミのアナルヴァージン♡　ボクが頂いちゃった」
「大好きな幼馴染の処女奪うのってこんなに興奮するなんて知らなかったぁ♡　これも、大妖魔様にドスケベオスマラぁ♡　つけてもらえたから、味わえるんだよね。やっぱり人間やめて、妖魔になれてよかったぁ♡」

「ね、せっかくだからぁ、キミもボクみたいに妖魔にならない？」
「はぁはぁ、ボクの眷属にしてあげるよ。配下っていうか奴隷っていうか、よくわかんないけど、ずっとボクと一緒にいられるよ」
「こうして、んあ、んああ、ぶっといチンポでいつだってキミを犯してあげることもできるし」
「んう、んううう、中出しだって、してあげられるッ♡　はぁはぁ、それにしても、いい、いいの、気持ちいい。キミのお尻の中、ぐちゅぐちゅって責めるの最高すぎぃ♡」
「ああ、妖魔になれて、良かったぁ。感謝します、大妖魔様ぁ♡　これから、ずっとこうして、チンポの気持ち良さぁ♡　感じていられるなんて、あっ、ああっ、男子ってズルいよぉ♡」

「はぁ、はぁっ、あれれ？」
「キミってばオチンポ、ギンギンにしちゃって、もしかして、お尻で感じちゃってるんだ？」
「けど、恥ずかしいことじゃないよ。だって、ボクもお尻をズボズボされるの、嫌いじゃないもの」
「むしろ、おまんこより、好きかも……はぁ、はぁっ……♡　だから、キミももっと感じてハァハァいやらしい声出していいよ」
「ん、んん♡」
「このまま、おっ立ったチンポに指先を絡めてぇ、ずちゅちずちゅって扱いてあげるね」
「ほらぁ、シコシコ、シコシコっ♡　張ったエラに指の腹を押しつけてとろとろになるまで擦りあげてくよ。」
「シコシコ、シコシコっ♡」

「ちっちゃいけど頑張って勃起しているキミのおちんぽ、ボクの手の中でビクビク跳ねてぇ、すっごく切なそう。」
「シコシコ、シコシコシコっ♡」

「ね、このまま出しちゃうの？」
「幼馴染のボクにオチンポ扱かれて、情けなく射精しちゃうんだ？」
「仮にもボクは妖魔なんだよ。」
「キミは祈祷師でボクらの敵なのに」
「こんなに気持ちよくさせられちゃって」
「射精までしちゃったら、大変なことだよね」
「本部にどう報告したらいいのかな？」
「妖魔に手コキでイカされました、なんて言えないだろうし」

「くすすっ。」
「けど、もう腰をへこへこ動かしちゃって、やめるなんて、まず無理だよね」
「シコシコ、シコシコシコっ♡」

「ほらほら、ほらぁっ、出せ出せ、出せっ♡」
「このままドロドロの精液い、びゅる～、びゅる～びゅぐるるる～って、思い切り射精っ♡　しちゃぇえぇ～ッ♡♡」

「あんんっ、出てる、出てるぅ」
「ぶっりゅぶりゅう、濃いせーし、溢れて、ぶちまけたザーメンで、キミのお部屋、どろどろに汚れちゃったね。くすすっ♪」
「はぁ、ボクの手にも、キミのチンポミルク、いっぱい絡んで、ねとねとしてぇ……」
「んれろ、れろぉ……はぁはぁ、とろみも匂いもすっごいエッチぃ♡　んぢぅ、ぢぅる、んぢぅるるっ……んぷはぁ……味もいやらしくて、美味しい♡」
「つい手についたヤツ、すすちゃったぁ……けど射精しても仕方ないよね、だって、こんなに気持ちいいこと、他にないもの」

「じゃあ、敗北せーしのお返しにぃー、キミの体に妖魔のどろっどろのザーメンの味を教えてあげる」
「もちろん、んあ、んあぁ、んあぁっ、キミのアナルまんこでね……くふ、んふぅ、んんっ、もちろん手コキも続けるから、そらそらっ、キミもお尻で感じながら何回でも精液出していいよ、ん、んん♡」
「だって、ボクひとりで気持ちよくなるなんて、はぁはぁ……なんだか悪いし、キミにも、もっと良くなってほしいんだ。はぁはぁ、ダメぇ♡　腰動かすの、もう止まらないっ」
「あっあっあっ、ああっ♡」
「くひ、んひぃ、キミの尻穴ぁ、良すぎてぇ、もう精液い、そこまで来てるぅ……んお、んおお…♡」

「ねえ……ボクの中で、人間だったころの最後の欠片がキミに謝ってるよ」

「ごめん、ごめんね……こんなことに巻きこんじゃって、ほんとうにごめんなさいって♡」
「ボクの心が弱いからぁ、気持ち良さに負けてぇ……ずるずる来ちゃったの後悔してるみたい♡、はぁ、はぁっ……けど、もう無理♡　無理ぃッ♡　んひ、ふひぃッ♡」

「出るぅ、出る出る出るぅ、出ちゃうのぉッ♡」
「ボクのふたなりチンポの中ぁ、こゆ～い精液ぃ、せり上がってきてぇ、もう先っぽまでぇ、き、来てるぅ♡　このままキミの耳ぃ、んれろ、れろれる、んれろぉ」
「んれろちゅぱ、舐めしゃぶりながら、いっぱいピストンするから♡　キミのアナルの一番、奥にぃ、んぅ、んううっ……んちゅぱ、ちゅ、ちゅぱちゅば、んちゅぶ」
「濃い精液ぃ、びゅぐびゅぐぅ、吐き出しちゃうよ。」
「んじゅる、れろ、れろれる、んれろぉ」
「お耳もツユダクれぇ、舐めまわして、れろぉ、れろれるっ♡　おっ、おっ、おっ、おおっ、これ、射精しちゃったら、全部スッキリしちゃうぅ♡」
「ボクの人間だったころの最後の一滴♡　ああっ♡　ああっ♡　射精したい♡　射精したいのぉ～ッ♡　キミのアナルに、びゅっぐびゅぐぅ、たっぷり射精してぇ」
「人間やめたいっ、完全な妖魔になるの♡　絶対気持ちいいのぉ♡　人間だった尊厳とか♡　退魔巫女の誇りとかぁ♡　キミとの思い出も♡　そんなの全部ぅ……ボクのフタナリちんぽに全部集めて♡　射精するの♡」
「こってりドロドロザーメンと一緒にぃ、今から、キミのアナルまんこに吐き出してあげる♡」
「んちゅ、ちゅぱちゅば、んちゅぶ、お尻の奥までぐちゅぐちゅされながらぁ♡　お耳、いっぱいしゃぶられて♡　キミもイキそうなんだよね？　はぁ、はぁはぁ♡」
「ほらぁ、そそり立ったボクのオチンポ、キミの中をズボズボではいりしてッ、お尻の奥の感じるところまでぜぇはぁ、いやらしくノックしてるの、わかるよねっ♡」

「ほらほらっ、キミも一緒にっ♡　イケ♡　イケイケイケっ♡」
「お尻ぐちゅ混ぜにされながら♡　メスアクメっ♡　決めちゃえッ♡」
「んちゅばちゅ、ちゅばちゅ、ちゅぼちゅぼ、んちゅぼぶぅ♡♡♡」
「んお♡　んふぅっ♡　きたきたきたぁ♡　射精するぅッ♡」
「熱くてドロドロでくっさいぃ、ボクのせーしぃ♡♡」
「射精♡　射精♡　射精♡　射精(で)るぅぅぅぅ♡♡♡！！！！」

「んあはぁ、んっはぁあああぁ……♡」
「ほらぁ、キミの奥に、びっしゃびしゃぁ♡　熱くて♡　濃いのぉ♡　ドバドバぁ、溢れてるの、わかるよね？　ふぅ、ふぅっ……キミのアナルも、きゅうううって、締まってぇ」
「ボクのナマ出しで、気持ちよくなってくれてるんだぁ♡　はぁ、はぁはぁ、キミのお尻の使い心地ぃ最高すぎて、言葉にできないよぉ…♡」

「んあ、んああっ、今もふたなりザーメンっ……ぎゅうぎゅう搾られてぇ……くう、くううっ…！」
「エッチにバキュームぅ、されひゃってるぅ…♡　あ、ああ、ボクぅ、大好きなキミに出しながらぁ」
「完全に妖魔堕ちぃ、しひゃったぁ、ぜぇはぁ、はぁ……ラブなキミのアナルまんこで、びゅぐびゅぐ出せてぇ」
「ちゃんと妖魔になれて、こんな幸せなこと、他にないよ。ボク、キミとのセックスでイったせいで人間を辞めて、素敵な妖魔になれたんだから。くすすっ♪」
「ふたなりチンポで人間のオスを犯しまくれる一人前の妖魔にね。」

「はぁ、はぁっ、だからキミにはいっぱい感謝しなきゃね。んちゅっ♡」